

捕獲

利岡正人

吐く息のこもった熱が
正面からよく見ようとした鏡を曇らせる
近づき過ぎて ぼんやり映る輪郭
絶えず世界を更新しよう
無数の傷のついた この表面を拭い続けてこそ
私の視界は確保されるのか

何ものかに見られ続ける
密林を何処までも突き進んでいた
鬱蒼とした藪の中で息をひそめる
獲物の微かな臭いを探して
眠るあいだも休みはない
明るい場所に引きずり出してやろうと
薄れゆく意識に抗いながら
感覚だけを研ぎ澄ませ
縄張りを越えてさまよう
飢えた妄念の影となって
意識を取り戻そうとする道のり
けれども 日の光も届かない森の奥処で
ようやく見つけたのは白いマスク
人間という哺乳類の痕跡
何のビジョンもなく
うつろに反射する
誰かが脱ぎ捨てて行ったものだ
傍らの切り株の上には映写機が置かれていた
スクリーンも掲げられていないのに
動物たちのための上映会が開かれようとしている
慎重に近寄ったが

「罨だー」と気づいた時にはもう遅く
映像のぶつ切り途切れた暗闇の中

泥濘にはまったかのように身動き取れず
先行きを見計らうとする

山猫の眼を光らせ

息を押し殺す以外になかった

ただ映写機の空回りする軽い音だけが
後へも先へも進めない辺りに響いていた

洗面所の窓から見える曇り空が

断片として映る鏡の中

自らの呼吸音に耳を澄ませる

目が据わっている 取り残された顔

どんな獲物が捕らわれているのかも判然としない
だから急いで野に放とうとも思わない